



2010/11 WEEKLY BULLETIN

国際ロータリー第 2790 地区第 3 分地区 B

市原ロータリークラブ会報



第 2272 回例会 2010 年 7 月 28 日(水) SAA/藤谷会員 会報担当/岡本会員
例会会場: 五井グランドホテル 市原市五井 5584-1 事務局 0438-38-3535

★点鐘 市原 RC 会長 西村美和子 ★ソング それでこそロータリー

★お客様

★ 会長挨拶 市原 RC 会長 西村美和子



皆様こんにちは

お暑い中をお集りいただきありがとうございました。

先日 7 月 24 日(土) グリーンタワーホテル千葉にて、地区の国際奉仕委員会セミナーが開催されました。

我クラブの白鳥パストガバナーが『国際奉仕について』というテーマで大変素晴らしい講演をされました。

その中で一番印象的であったお話は『ロータリーはまず参加して、そして感動を得ることです。』とおっしゃったことです。

皆様が集まって楽しいと感じ、何か得るものがなければ、会は活性化していきません。その為にはまず、参加していただく所から始まるのだと思います。

参加していただいて、様々な感想を持ち、その中で感動したり、自身との見解の相違を見つけたり、共感したりと体験されることが、理解と楽しみを引き出す大切な糸口になるのです。

どうぞ、今後はこの様な視点を持ち例会に出席して下さいませ様お願いします。

本日はまたロータリークラブで素晴らしい歴史を築いてこられた齋藤・白鳥両パストガバナーのお二人に卓訪をお願いしました。

テーマは自由に思うところをお話しいただければ幸いです。

本年は会員の皆様お一人お一人に自由にスピーチをしていただきます。

宜しくお願いします。

★ 幹事報告 幹事 伊藤英樹



1. ガバナーエレクト事務所設置の案内が来ました。

木更津市請西東 1-5-4 TEL0438-72-2790 FAX0438-72-2794

2. ポールハリスフェローの認証状およびバッジ、マルチプルポールハリスフェローのバッジが届きました。皆さまにお渡しいたします。



●齊藤博会員

タイトル:ひと言の重み

父の跡を受け継いで、眼科を開業して十数年経ったある日、こんな事があった。患者さんが一番混んでいる午前 10 時頃に、受付に「是非先生に会いたい」と言う一人の男性が訪ねて来られました。

何事かとやむなく診療を中断してお会いして見ると、40 歳前後と思われる小太りで、両側の鬢に少々白いものが混じっている、しかも自信に満ちた顔付きの男性が立っておりました。

中に入ってもらって話を聞くと、「先生はもうお忘れと思いますが、私は昭和 31 年頃、千葉大眼科で先生に診てもらった者です。その頃私は、千葉の或る鉄工場で見習い工員として働いておりました。

或る朝突然に目が見えなくなったので主人に話したら、数日経ってから奥さんが、渋々大学病院眼科に連れて行って呉れました。主人夫婦は、私が仮病を使っていると思ったようでした。

検査、偉い先生の診察が済んで、別室で病気の説明をしてくれた担当の先生は、“突然に起きた視神経炎で、必ず治りますから入院するように”と勧めて呉れました。私は大変絶望していたので“本当に治りますか”と念を押したら、病気の原因、治療方法などを事細かに説明して“必ず見えて来ますよ、治りますよ”と言ってくれたので、私はホッとした。

しかし、主人は入院させてはくれませんでした。そして見えないまま、故郷新潟に帰された。家も貧しく苦しかったけれど、おふくろは無理を押し、近くの病院に入院させてくれました。

やがて一ヶ月ほどして視力も回復し、退院。その後東京で修行の後再び故郷に帰り、お陰で今では、小さいながらも自分の店を持つ事が出来ました。何時もあの苦しかった日、心から励ましてくれた先生はどんな方だったんだろう、一目でいいからこの目で見たい、会って礼を言いたいと思っていました。検査の途中で“齊藤先生電話ですよ”と看護婦さんが呼んだので、何とか名前は覚えていた。病院に訳を話して再三照会した処、ようやく先生の住所を教えてくれて、今日訪ねて来る事ができました。あの時は勇気づけて呉れて安心し、本当に嬉しかった」と言うのでした。

そう言えばその頃、私も将来を夢見る青年医師で、教授から与えられたテーマ“緑内障と血糖との関係、特に間脳機能に就いて”の研究の最中で、午前は外来、午後は手術・入院患者さんの治療、そして夕刻から研究と、深夜まで続く毎日でした。

ある日、茶色のモスリンの着物を着た 50 歳がらみの女性に手を引かれ、痩せて顔色のよくない 17・8 才の青年が、視力障害を訴えて来院されたのを思い出しました。

当時入局二年未満の医局員は、初診の方の予診を採り、その訴えに相当する諸検査を総て済ませて、資料を揃えて教授の診察を受けるのが、常道でした。診察が済んで病名も決定して、担当医の私が、その病名について、原因・病状・治療方法などを説明したにも拘わらず、付き添い人は不本意な、半ば私を疑うような顔付きで帰って行った。廊下をどんどん歩く付き添い人の着物の袖にすがりついて、右に左に、おぼつかない足取りで去って行ったその青年の後ろ姿が心に残った。それっきりでした。

「会えたから、これで気が済みました。これからすぐに新潟に帰ります」。突然の事で、咄嗟に身につけていたネクタイピンを外して差し上げたら、大変に喜んで帰って行かれました。

後で考えて、あの時充分な説明が出来たのだろうか。当然の事ながら一言一言が、聞く側にとって大きな響きになると言う事を、今更ながら強く感じました。

その後、昭和 43 年に、川上先生、酒枝先生のお勧めもあって、市原ロータリー・クラブに入会しました。

ロータリー・クラブは 1905 年(明治 38 年)2 月 23 日に、イリノイ州シカゴの、一青年弁護士ポール・パーシー・ハリスが始めた運動だそうで、彼はどのような経緯(process)で、この運動についてのアイデアを得たのか探索しました。

まず第一に彼の生い立ちがその原因となっているように思われます。彼の生まれはウィスコンシン州ラシーン(Racine)で、三歳の時、父親が破産し、父母が別居した為、一家は四散する。妹は母親とともにラシーンに残り、彼は兄のセシル

と共に父親の実家に身を寄せるため、ニュー・イングランド地方のウォリングフォード(wallingford)にやって来た。そして間もなく兄のセシルは伯母に引き取られ、ポールだけが祖父母の家に残って育てられたというのですから、かなり逆境だったと言ってもよいのでしょう。幸いにして、ニュー・イングランド地方の、勤勉・質素・実直な生活態度を祖父母から知らず識らずのうちに身につけたことが、ロータリー運動の根底をなす出来事と言っても良いようで、彼の晩年の追想に「我々は長い年月を顧みれば、或る時には重要だと考えたことも大したことではなく、消え失せることも多いものである。しかも、それほど重要だと思わなかったもので、かえって、他のことなどはどうでもよいと思わせるほど、極めて重要なものもある。

犠牲・献身・名誉・真実・誠意・愛

これらは良い旧式な家庭の素朴で高潔な特色であった。」と記されておりました。

今日でも、ロータリー運動のどこかに貴族趣味的な要素が漂っておりますが、これは、決して単なる貴族趣味ではなくて、宗教的自由と良心の自由を求めて、アメリカ東北部に植民したニュー・イングランド人のピューリタリズム・清教徒気質に由来するもののようで、個人の尊厳と独立を基調とする処の、極めて程度の高い「知性」と、ニュー・イングランド地方の自然の厳しさに対する闘いから得た「勤勉さ」によるものの様であります。

ロータリー運動というものは平凡であっても。その日その日の生活に全力を捧げるという非常に単純な原理に基づくもので、愛・勤勉・他人に対する思いやりと言った平凡な原理を、常に心の中に温存しようとするものであります。即ちロータリー運動に参加する者の心構えとしては、「ロータリーは、総ての人間の、総ての生活に貢献する運動である。奉仕と言うことを何時も脳裏に刻み込んで置け」(ロータリーの創設者ポール・ハリス; 米山梅吉訳)と説いております。

そんなことで、それ以来患者さんには、病気の説明と同時に、ロータリーから学んだ奉仕の心を胸に刻んで、気持ちのそして心の安らぐ言葉を、一言付け加えるよう努めております。

大変手前味噌のような話で恐縮ですが、これで私の担当を終わります。この後は新進気鋭、現在地区の指導的立場である白鳥 PG のお話をお聞きください。

ご清聴有り難うございました。

★卓話



●白鳥会員

タイトル: ロータリー雑感

私は山崎さんに勧められて市原ロータリー・クラブに入会し、29年目になります。早いものです。

入会してからは、与えられた委員会活動において先輩からロータリーの知識やルールを知り、ロータリーの全体像を描くことができました。例会からよりセミナーの往復の車中や時々の炉辺会談の方が、ロータリー教室でありました。日ごろ厳めしい顔付きの先輩に、ロータリーの話をお聴くことから親近感を抱けるようになって気楽に例会に出席できるようになり、ロータリーを身近に感じてまいりました。

何回か担当した週報の作成をテープ起しから始めて正味4時間かけて、分からない言葉を訊きながら、要旨を纏めるのに苦労しました。要領を覚え、テープ起しより、卓話をメモして要旨を書き上げる方が数段早く、しかも正確にできるようになりました。その後、講演や各種セミナーをメモするようになり、この作業が私に大きな利益をもたらしています。

そのほか、ロータリーはいろいろな役目を与えてくれます。そのたびに、洞察、寛容、親睦、多様性、高潔性とは、何かを真剣に考えるようになりました。それに思慮深い感覚や分別ある考えが、ロータリー・ライフの中で

ごく自然に養われていることに気付いたのです。豊かな感性（センス）を身につける機会がロータリーには随所にあり、ロータリアンとの交流が人生を彩りあるものしています。私にとってロータリーは感動的であります。

中村滝男さんの書いた本に「メダカが空を飛ぶ」という話があります。ある禿山に大雨が降った後、くぼ地が池になってそこにメダカがいる。なぜメダカがいるのか。メダカが飛んできたとしかいいようがない。小、中学生は「竜巻が起こったからではないか」とか、「コイと同じく山を登ってきたのではないか」と答えるかもしれない。しかし、それは川がないからできることではない。山の下にある池で鳥が魚を食べていました。しばらくするとおなか一杯になって上に飛び立って下を見ると、水溜りがあるので、そこで水を呑みました。そして飛び去りました。しばらくして水溜りにはたくさんのメダカは泳ぐようになりました。つまり、下の池にメダカの卵がいっぱいあって、鳥の羽や足に付着して禿山の上の水溜りに来て孵化してこういう結果になった。それしか考えられない。このように考えるに至るセンスがあるかないかは、その人の人生において重要なことです。ものごとを多面的に捉える訓練をロータリーはいつも促しています。

私は世界にネットワークを張り巡らしているロータリーから見聞を広め、いろいろなことに関心を持つようになり、今までにない角度からも物事を見るようになりました。未知の分野の知識から分別ある教養が身につく、謙虚さと向学心が芽生えてきて、自己中心的でなくなり、人間性の向上に繋がっています。ロータリーが及ぼす影響は凄いと思えました。

鎌倉初期の道元禅僧の言葉に「霧の中を歩めば、覚えざるに衣湿る」という一節があります。朝早く起きて、朝もやの中を歩いて帰ってみると、知らないうちに衣が湿っていた。その場所にいるときはわからないが、知らないうちに影響を受けてしまう。ある雰囲気の中にいると自然に影響を受けてしまうという話です。孟母三遷の教えもあります。

所属するクラブの雰囲気がロータリー・ライフの中でどんなに大切であるかを述べるまでもありません。クラブを切磋琢磨、自己研鑽の場とするならば、クラブの雰囲気作りをおろそかにできないとつくづく思います。

もしロータリーに入会していないならば、これほどの人間的な成長と、世の中の真実（本もの）を知りえたかどうか疑問であります。

私は28年間のロータリー・ライフにおいて多くの感動と恩恵をたっぷり受けています。これもロータリーと皆さまのおかげであると深く感謝しています。有難うございます。

★ニコニコ・Sorryボックス

●三木敏靖会員

姉崎神社夏季例大祭が終わりました。朝5時から夜9時頃まで、とにかく神輿が無事宮に収まりホッとしています。福原会員も奮闘しておりました。

●齊藤博員

お暑い中、私の拙話をお聴き戴きまして！！

●西村会長・伊藤幹事

齊藤会員、白鳥会員卓話ありがとうございました。

★ 出席報告

前々回 79.5% 本日出席 33名 欠席 10名 本日出席率 77.27%